頼光一代記下

つづき
鬼童丸

頼光
頼信

つぎ
鬼童丸

▲荒ふる
次へ

できさるは四天王の人〴〵も容易く討得べき
ともみえざりければ頼光ハ高より飛
でかの髭切丸の名刀を抜もあへず
鬼童丸の首を討落しのたまはれ
ども首ハその儘に大手を拡
廣げ雲を起しつゝ頼光を
目懸て飛かゝる綾下部の
季武坂田金時左右
より前後をも切刻
ける又渡辺綱保雅珠
貞光ハ前後よりてんで
切付ければ鬼童丸の
首ハ脆く落ぬ
鬼童丸
▲それより大江山に立帰り頼光
主従の人〳〵鬼
童子の
よはひ
残らず
討取て
二千余人を
救けられ
次へ

例も為せ出すく
切さへ今更頼光
金銀ハ取らせる
者ハ将軍太子
忽つ亡びるよ帰る
御叢高も
徳く
み
集
まり
暴悪を
極むる中に▲
頼光

つゞき

後の世に名を残す者をおぼえる為べ
き為なり源頼光の郎等四人も鎧兜紙帷の名所
多勢の敵軍二万騎をうち平らげ挙出さるゝ
軍二万騎をさゞけて捕る人日記れ

渡辺綱

坂田金時

卜部季武

卜部季武

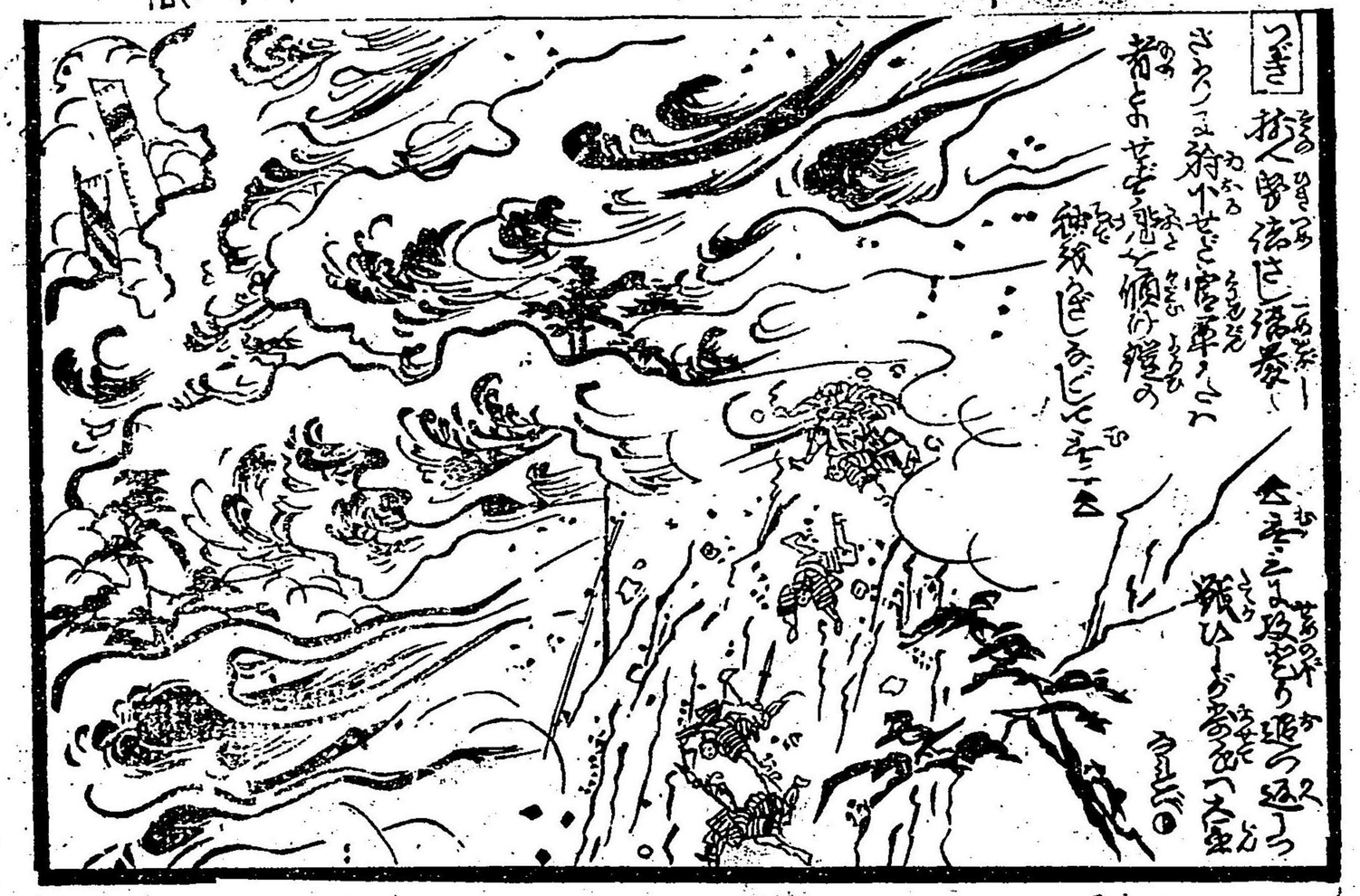
碓氷貞光

渡辺綱

坂田金時

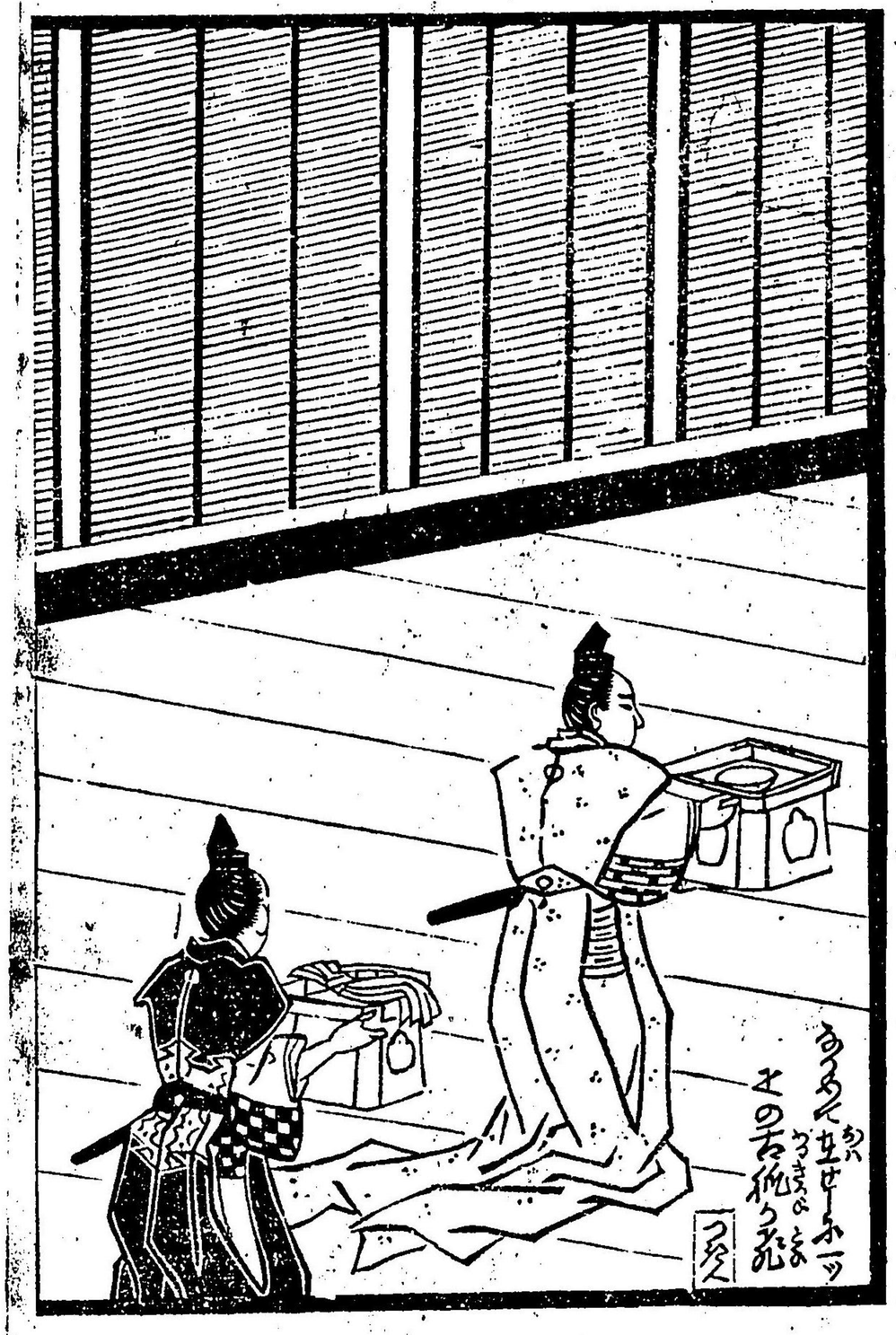
源頼光

鎧兜紙帷の名所


つゞき

つゞき
頼光

つき



頼光

▲らいよく武名と天下ふ東色の人千度牧光公へ名馬千匹と獄上せつる且つるより幸よりいてゆ屋敷別で結々よりさ且る文寛弘年中陸奥国結ち府軍まるりのよ世の中大ひよ静謐よ和れば牧光公も暇よ成ら成月後のと

つき出し 頼光公と名乗る仲なく那処此処と求めるとは何さま高慢の口ぶりと打笑ひ是ぞ生捕の今宵の元うり一生の名を戒め給ふ是れ先も角も高り紙一と為て元んと奉よ

曳せて名乗るよ打笑ふと此の狐が那処に出て居の前後と孤めるよ頼光云い懸りの曲者ありて余が目前よ独旦る人我と侮る者と云ふ

一足後よ飛下りて絃と変ちよ切葉らにーぶ伝よ鋭く考人の口先刺うと此元狐の那処に余と侮ると入を云ふ全く無ひ

又なる者の曲者なる狐成と云ふ後

又なる者の姿成を金ざうーと又曲者の鬼童丸う成ハ知て頼光公と対んと求の身

月明ひいとうー者ありとは人数多ふ頼光公ハ病ひの所よ元ひーぶ深井よ寄らを逃よ流者元年七月廿四日に年八十と逃ける

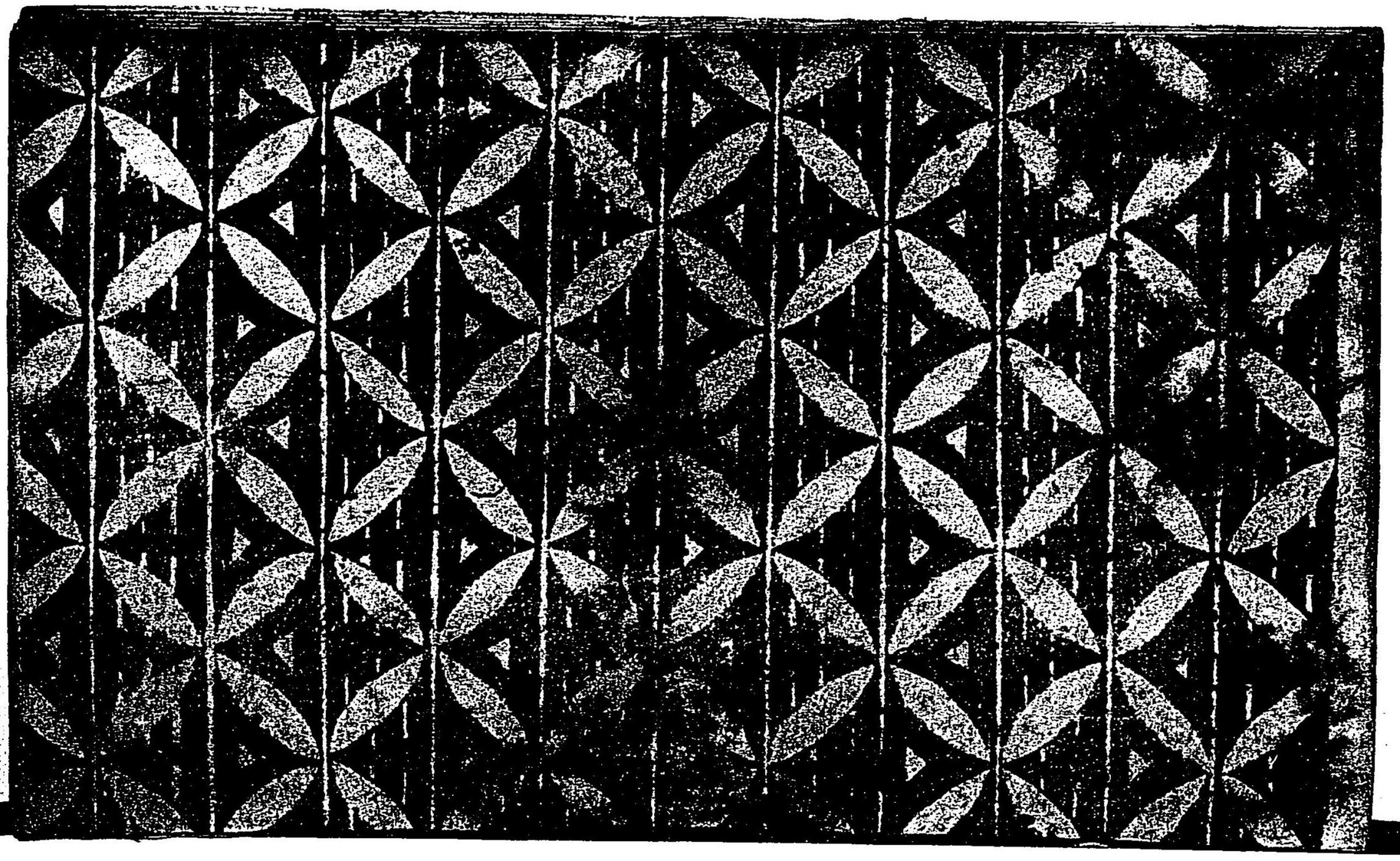
さまとれば人結構ぶ者ぞあり

うるる又四天王の人くハ者ぶ死君と逃藤の金ぶ七月の

入を人

頼光公の者ぶ死と刺ん

入りて其ぶ頼光公も焼いん逃後のひーぶ

上するよ術ひとたろ手繰ん

御届 明治十三年十二月二十日
本所緑町四丁目五十番地
編輯兼出版人 荒川吉五郎